教育コラム「愛のかけはし」：２５８号

令和５年５月
江差町教育委員会
学校教育課

『心からの"思い"は伝わる』

例年より早い雪解けを追いかけるようにやってきた桜前線は、速度を緩めることなく足早に去って行きました。ゴールデンウイークを前に迎えた満開のため、桜花爛漫を目にできなかった方も多かったのではないでしょうか。

４月、今年度の入学式は、マスクを外した児童生徒の笑顔とご参列の皆様の祝福の笑顔が交わり、明るく希望に満ち溢れた時間になったようです。入学式後に式場の外や道路で見かけた光景では、新入生である小１・中１はもちろん、先輩となった他の学年の児童生徒もとても良い表情でした。保護者の皆様もピカピカに輝いて見えました。入学式を一堂に会して祝えるようになったことは、この春何よりも心を弾ませられる出来事であったと思います。

入学式に先立つ４月３日（月）、江差町に赴任した教職員の辞令交付式が３年振りに行われました。教育長式辞では、町長の策定した【江差町教育大綱】にある「子どもたちが夢や希望を持って成長できる社会であればこそ、まちづくりの推進や、地域の活性化の道が開けると確信しています。」という一文に触れ、「単にふるさとの歴史文化等を学ぶだけでなく、どのように街を育てるべきかといった一歩進んだ学びの展開を期待します。そして、子どもたちの提案に耳を傾け、実現可能なものは検討し実行に向けた準備を考えたい。」と教職員に向けて話しました。また、南が丘小学校の校長室に飾られている『どの子も子どもは星』という東井義雄氏の詩に触れ、「子どもたちそれぞれが大小たくさんの才能を持っています。教職員の皆さんには、子どもたちの放つ小さな光を見つける努力を惜しまずに、たくさんの心の才能を見出し育ててほしいと思います。江差の子どもたちを共に育てるパートナーとして、一緒に伴走したい。」等、心から発する"思い"が語られました。その言葉に反応し、『うんうん』と頷きながら聞く転入教職員の姿も見られ、力を合わせて江差の子どもたちの成長に関わろうという意識の共有が感じられました。おそらくその"思い"は、始業式・入学式で児童生徒たちにも伝わったでしょう。先生たちの話を『うんうん』と頷きながら聞いたであろう子どもたちの姿が目に浮かびます。

「個別最適な学び」という言葉を耳にします。町内各小中学校では、ＩＣＴの活用も含め、子どもたちの「個に応じた指導」の充実に努めています。もちろん学習指導のみならず、生活指導においても個々の特性を把握した上で適切な対応に努められていることが、各校の通信や学校を訪問した時の児童生徒・教職員の様子から感じています。大切なのは互いを大切と考える"思い"です。

学校での在職中に、先生たちの了承をいただき、一枚の紙を職員トイレに貼らせてもらいました。それは、自分自身が常に心に置きたかったことであり、その意識が、子どものみならず学校全体に心理的安全性のある人間関係を形成すると思っていたからです。

「教師十戒」　（「肩車にのって」毛涯章平著　より）

① 子どもをこばかにするな。教師は無意識のうちに子どもを目下の者と見てしまう。子どもは一個の人格として対等である。

② 規則や権限で子どもを四方から塞いでしまうな。必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。

③ 近くにきて自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。

④ ほめることばも、叱ることばも、真の「愛語」（相手を思いやることば）であれ。必ず子どもの心にしみる。

⑤ 暇をつくって子どもと遊んでやれ。そこに本当の子どもが見えてくる。

⑥ 成果を急ぐな。裏切られても、なお信じて待て。教育は根くらべである。

⑦ 教師の力以上には、子どもたちは伸びない。精進を怠るな。

⑧ 教師は「清明」（自然で明るく、ゆったりとする）の心を失うな。ときにはほっとする笑いと、安堵の気持ちをおこさせる心やりを忘れるな。不機嫌、不愛想は、子どもの心を暗くする。

⑨ 子どもに素直にあやまれる教師であれ。過ちはこちらにもある。

⑩ 外傷は赤チンで治る。教師が与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。

これは、教師と子どもの関係に限ったことではなく、『子ども』を職場や家族など周囲の人に置き換えてもあてはまる点があるかと思います。

管理職の道に入った時、大先輩にいただいた言葉があります。

「管理職が先生たちを大事にすれば、先生たちは子どもたちを大事にする」

役場にあてはめると、**「管理職（上司）が職員を大事にすれば、職員は町民を大事にする」**といったところでしょうか。

「教師十戒」とともに、常に意識することを忘れないよう努めましたが、失敗はたくさんあります。先生たちを大事にするためには、個々の状況を把握し丁寧に対応し、職員全体に平等感を持ってもらうことが不可欠と思っていました。しかし、仕事量や難度など業務の平準化や属人化の解消がなされなかったため、個々の職員の感じ取る平等感と隔たりを生んでしまったのもその１つです。職員の業務状況を把握して評価を返してあげることや努力に対して労いの声をかけることの大切さを心に刻まされました。それでも、先生たちはしっかりと子どもたちを大事にしてくれました。きっと先生たちが未熟者の私をしっかり把握してくれて、**"思い"**を受け止めていてくれたのだと思います。今、改めて感謝です。